

一説足立也、夜いねたる者、足たちておくる也、前説を用ゆべし、

〔東雅天文〕朝アサ略○中 アシタともいふは、萬葉集抄に、古語にシタといふは、間ヒマといふ詞なりと

いふなり、さらばアケシホドなどいふが如し、

〔倭訓栞前編二〕あした 朝旦などをよめり、また反さ也、あさと同じ、

〔萬葉集二〕挽歌 吉備津采女死時、柿本朝臣人麿作歌一首并短歌、

露己曾婆朝爾置而夕者消等言霧己曾婆夕立而明者失等言略○下

〔源氏物語九〕おとこ君はとくおき給て、女君はさらにおき給はぬあしたあり、

〔八雲御抄三上〕朝 たまひこ或はたま あさな あさけ朝開朝 朝あけ 萬には、つととよめ

り あさまだき 朝びらき是朝 あけたつ是朝也

〔日本釋名上〕朝アサ ひるのいまだあさき也

〔東雅天文〕朝アサ略○中 朝アサといふは、アサは開也、日本紀釋に、開の字、讀天開き明かなるをい

ふ也、

〔倭訓栞前編二〕あさ 朝をいふ、あは明く也、さは少也、狹也、豊後の方言に、あすらといへり、すら反

さ也、

〔延喜式八〕祝詞 祈年祭

水分坐皇神等能前爾 白久中略○皇御孫命能 朝御食夕御食能 加牟加比爾、長御食能 遠御食登 赤丹穗

爾聞食故○下

〔萬葉集八〕秋相聞 笠女郎賜大伴宿禰家持歌一首

每朝吾見屋戸乃瞿麥之花爾毛君波有許世奴香裳

〔饅頭屋本節用集時安〕旦々